

ダニエル書10章「国々の興亡と霊の戦い」①

1A 主の使いの現れ 1-9

1B 三週間の断食 1-3

2B キリストの栄光の輝き 4-9

2A ダニエルへの励まし 10-19

1B ペルシアの君の妨げ 10-14

2B 立ち上がるダニエル 15-19

3A イスラエルを守るミカエル 20-21

本文

ダニエル書 10 章を開いてください。私たちは、ダニエルの見る幻で最後の幻に入ります。これまで、7 章でダニエルが、海から出て来る四頭の獣の幻を読みました。8 章において、雄羊と雄山羊の幻を見ました。そして 9 章で、私たちは、ユダの民と聖なる都について、それが回復するのが七十週であることを読みました。それぞれの幻と夢は、一つの方向性を示しています。主が、ダニエルの民、ユダヤ人をどのように異邦人の支配から救い出し、またエルサレムの都を回復させるのか、ということです。そして主ご自身が、その御名の栄光のために、ご自分の民を救われること、またご自分の住まい、宮に御顔を輝かされます。

そして私たちは、最後の幻に入りますが、同じ流れ、イスラエルが異邦人の支配から免れ、救いにあずかるところを見ていきます。「**大きな戦い**のこと」と 1 節にあります。そうです、終わりに起こるハルマゲドンの戦いにまで至る、膨大で、壮大な幻です。12 章にまで続きます。10 章では、その幻を伝えに、主からの使いがダニエルのところにやって来る場面を読みます。ところが、彼がやってくる時に、ペルシアの君が邪魔をしたという話が出てきます。この幻を巡って、壮絶な霊の戦いがあったことを示しています。

1A 主の使いの現れ 1-9

1B 三週間の断食 1-3

¹ペルシアの王キュロスの第三年に、ベルテシャツアルと名づけられていたダニエルに、あることばが示された。そのことばは真実で、大きな戦いのことであった。彼はそのことばを理解し、その幻について悟った。

ダニエルが、「ペルシアの王キュロスの第三年」にまで生きていたことがここに書いてあります。彼は、イスラエルの民がエルサレムから引き抜かれていた間、捕え移されていた間、その外国の地で主に仕えるという大きな使命を、神から与えられていた人でした。1 章は、彼が友人三人と共

に、ネブカドネツアル王の元年から仕えるようになったことが書き記されていました。そして、彼は、1章21節によると「**キュロス王の元年までそこにいた。**」とあります。バビロンの王宮にそのまま留まっていたが、キュロスが王になって間もなくして、10章4節にあるように、ティグリス川の方面に移動したのでしょう。

キュロスは、紀元前536年頃に統治を始めました。そしてユダヤ人たちに、エルサレムに帰還すること、彼らの神の宮を建てることを布告します。しかし、彼はエルサレムへの帰還民と共に戻りませんでした。彼はもう90歳ぐらいの老人です。老齢ということもあって、そこに残っていたかもしれません。ちなみに、総督ゼルバベルと大祭司ヨシヤ率いるユダヤ人の帰還民は、離散しているユダヤ人の中ではごく少数でありました。多くの人々が未だ、離散の地に残っていました。そして、9章で預言されていたように、エレミヤの預言したユダヤ人帰還の約束は、必ずしも帰還後、バラ色を約束していたわけではありませんでした。むしろ、困難が続き、荒らす忌むべき者が現れるという大きな試練が待ち構えていたのです。

しかし今、彼には更なる使命が与えられていました。主から新たに幻を受け取り、それを書き記すことです。「**そのことばは真実で、大きな戦のことであった。**」とあります。ダニエルに、神のことばが啓示されました。それがあまりにも私たちの理解を超えたものであり、信じがたいことであるので、「**そのことばは真実で**」と念を押しています。かつてヨハネが黙示録において驚くべき幻を示された時に、「**これらは神の真実なことばである(19:9)**」と天使から念を押されていました。私たちにしても、驚くべき言葉があれば、それがいくら聖書に書かれていても、「**どうなのかな?**」と疑問に思ってしまうかもしれません。だからこそ「**真実な言葉である**」と念を押してくれているのです。

そしてその驚くべき内容は、「**大きな戦**」です。ここは、「**長くて、困難が多いこと**」というように訳すこともできます。これから、ペルシアだけでなくギリシアの王たちの戦い、そして終わりの日における世界規模の大戦が啓示されます。そして、これらの長い歴史の中で、ユダヤ人たちが受ける試練と最後の救いについて示されます。ところで、「**ベルテシャツアルと名づけられていた**」と自分のことを書いていますが、これはバビロン時代から使われていた正式名であったので、自分の書き記していることが、自分自身が書いたことを明確にさせているのでしょう。

そして、ダニエルは「**彼はそのことばを理解し、その幻について悟った。**」と言っています。彼の悟りには、進展があります。7章において四つの獣の幻を見た時は、「**7:28 私ダニエルは、いろいろと思い巡らして動揺し、顔色が変わった。しかし、私はこのことを心にとどめた。**」と言いました。8章において雄羊や雄山羊、そしてその後のアンティオコス・エピファネスについての預言を受けた時に、「**8:27 私ダニエルは、何日かの間病気になったままでいた。その後、起きて王の事務を執った。しかし、私はこの幻のことで驚きすくんでいた。それを理解できなかったのである。**」とあります。けれども9章で、彼はエレミヤ書を手にして、七十年の捕囚の帰還を知り、そして悔い改めの祈り

を献げます。すると、ガブリエルが再びやってきて、彼に七十週という期間を伝えてくれたのです。このようにして、初め彼は、悟ることができず、動揺していたこれらの言葉は、今は、完全とは程遠いけれども、大体のとことで悟ることができたのです。

思えば、イエス様が甦られてから行われたことも、これと同じだったような気がします。十字架に付けられるにご自身が十字架に付けられると宣言されても弟子たちには、混乱と困惑が広がるばかりでした。そして十字架刑の時には躓きました。しかし、甦られて弟子たちに語られる時は、聖書全体からご自分のことについて教えられたのです(ルカ 24:44)。信じがたいことであっても、悟ることが鈍くても、主は忍耐して彼らに教え、建て上げていられました。そして今度は弟子たちが、神の救いのご計画全体を他の人たちに伝えることができるようになります。パウロがエペソの長老たちを集めて、「私は神のご計画のすべてを、余すところなくあなたがたに知らせたからです。(使徒 20:27)」と言いましたね。私たちも、霊的に前進するにしたがって、初めは分からずに動揺し、逡巡するようなことがあっても、次第に悟っていき、落ち着きを持っていくことがあると思います。

² そのころ、私ダニエルは、三週間の喪に服していた。³ 満三週間、ごちそうも食わず、肉もぶどう酒も口にせず、また身に油も塗らなかつた。

ダニエルは、三週間、喪に服していました。そして、完全な断食ではなく、ごちそうや肉やぶどう酒を避け、また体を元気に見せる、身だしなみのような油塗りもしませんでした。悲しみを表していたのです。これはおそらく、帰還民からの知らせが入っていたからでしょう。エズラ記とネヘミヤ記、またハガイ書とゼカリヤ書もそうですが、バビロン捕囚の間に、エルサレムは瓦礫の山であり、荒れ果てており、どこから手をつければよいか分からない状況でありました。紀元前 516 年に神殿はなんとか再建されていますが城壁はなく、紀元前 445 年にはネヘミヤが、エルサレムの惨状を聞いて泣いて祈っています。

エレミヤの預言によって、神は災いの計画ではなく、将来と希望を与えるものであるという神の約束を読んでいたにも関わらず、それがそのように実現しているように見えない状況でありました。ここに信仰の戦いがあります。忍耐が試されます。私たちも、約束を手にするまでに必要なのは、信仰を働かせ、忍耐を尽くす祈りです。

2B キリストの栄光の輝き 4-9

⁴ 第一の月の二十四日に、私はティグリスという大きな川の岸にいた。

幻を受けた時が記されています。「第一の月の二十四日」です。過越の祭りが十四日にありますから、彼は過越の祭りの間、その祝いの祭りの間もエルサレムのことを思って、悲しんでいたのでしょう。過越の祭りはエジプトからの救い、脱出を意味していましたが、今やバビロンからの救い、

奴隷からの解放、そして帰還を果たしており、第二の出エジプトとなっていたのですから、大いに喜べるはずなのですが、エルサレムの状況が状況であり、これでは本当の意味での解放ではないと思っていたことでしょう。

そして幻を受けた場所は、ティグリス川のことです。ユーフラテス川の東を流れていて、下流ではユーフラテスと合流する川です。からそう遠くはありません。彼は8章の幻では、ウライ川のほとりにいたのですが、それは幻の中でした。ここでは違います、彼は実際に川の岸にいます。そして彼は、ペルシア帝国の都スサから離れています。もしかしたら、離散したユダヤ人たちがいたところに近い所にいたかもしれません。エゼキエルは、他のユダヤ人たちがいるところで、ユーフラテス川の支流のケバル川のほとりで幻を受けていました。そして、後の学者エズラはユダヤ人たちを集め、帰還をしようとしていますが、アハワ川という、これまでユーフラテス川の支流のところにいました。彼が他のユダヤ人たちと共にいたということは可能性があります。そして、ダニエルはこの川の岸辺で御使いにこれから会います。12章においても、川の岸辺で預言を受けている彼の姿が出て来ます。幻はずっとティグリス川のところで受けていました。

⁵ 私は目を上げた。見ると、そこに一人の人がいて、亜麻布の衣をまとい、腰にウファズの金の帯を締めていた。⁶ そのからだは緑柱石のようで、顔は稲妻のよう、目は燃えるたいまつのもようであった。また、腕と足は磨き上げた青銅のようで、彼の語る声は群衆の声のもようであった。

天の御座にある栄光をそのまま表しています。亜麻布の白が代表している白さ、金の帯が代表している輝き、そして緑柱石は栄光の輝きと貴さを示しています。顔の稲妻と燃える松明のような目は、神の威光と全てを見通している目です。そして、腕と足の青銅は神の裁きを表しています。

ほとんど同じ御姿を使徒ヨハネが見ました。黙示録1章を開いてください。「1:13-16 また、その燭台の真ん中に、人の子のような方が見えた。その方は、足まで垂れた衣をまとい、胸に金の帯を締めていた。14 その頭と髪は白い羊毛のように、また雪のように白く、その目は燃える炎のもようであった。15 その足は、炉で精錬された、光り輝く真鍮のようで、その声は大水のとどろきのもようであった。16 また、右手に七つの星を持ち、口から鋭い両刃の剣が出ていて、顔は強く照り輝く太陽のもようであった。」ほとんど同じですね、そして続けて読みますと、こう書いています。「1:17-18 この方を見たとき、私は死んだ者のように、その足もとに倒れ込んだ。すると、その方は私の上に右手を置いて言われた。「恐れることはない。わたしは初めであり、終わりであり、18 生きている者である。わたしは死んだが、見よ、世々限りなく生きている。また、死とよみの鍵を持っている。」明らかに、イエス・キリストご自身です。

御子は、「神の栄光の輝き、また神の本質の完全な現れ」とあり(ヘブル 1:3)、高い山で、栄光の姿に変貌されました。「マタ 17:2 すると、弟子たちの目の前でその御姿が変わった。顔は太陽

のように輝き、衣は光のように白くなった。」とあります。父なる神の独り子としての輝きです。ですから今、主ご自身がダニエルに現れてくださったと考えてよいでしょう。使徒ヨハネは、ダニエルがかつて見た、主の使いの幻を思い出し、黙示録がいかにも、ダニエルの見た幻と預言を基調にしているかを、同じ幻によって教えていたと考えられます。

しかし、「そうではない、ひとりの力強い御使いであってイエス・キリストではない」という見方もあります。なぜなら 13 節に問題を感じるからです。「ペルシアの国の君が二十一日間、私に対峙して立っていたが、そこに最高位の君の一人ミカエルが私を助けに来てくれた。」とあるからです。全能の神の御子イエス・キリストが、ペルシアの君と呼ばれる墮落した天使の抵抗に打ち勝つことができず、ミカエルの助けを必要とすることは考えられない、と考えるからです。

確かに、天使について聖書の中にある姿をじっくり調べると、その栄光は主ご自身そのものではないかと錯覚してしまう程の輝きがある時がありますが、主ご自身ではありません。黙示録で最後の七つの災害、七つの鉢を持っている御使いは、「彼らは、きよく光り輝く亜麻布を着て、胸には金の帯を締めていた。(15:6)」とあります。イエス・キリストご自身の御姿と似ていますが、主ご自身ではありません、御使いです。そして、使徒ヨハネ自身が天使を礼拝しようとする過ちを犯しました。「私は御使いの足もとにひれ伏して、礼拝しようとした。すると、御使いは私に言った。「いけません。私はあなたや、イエスの証しを堅く保っている、あなたの兄弟たちと同じもべです。神を礼拝しなさい。イエスの証しは預言の霊なのです。」(黙示 19:10)」つまり、それだけ神の栄光に御使いが輝いていて、ヨハネが拝んでしまうようになるほど、神の栄光を表しているのです。ですから、非常にイエス・キリストに似ていながらも、実は他の天使であった、ということです。

けれども、やはりこの人はイエス・キリストご自身だと私は感じます。二つの可能性があります。13 節の発言は、話している人は、5-6 節とは異なる御使いだということです。人物とは異なるとも考えられるからです。10 節に「一つの手が私に触れて」とあります。この人物が必ずしも、5,6 節の人物とは限らないのです。同じように、16 節に「人のような姿をした方」とありますが、これも他の天使、または 5-6 節の主イエスご自身だとする解釈です。これまで、ダニエル 8 章を見ると、複数の御使いが、すばやく移動し、交互に会話しているのを認めることができます。そして 12 章、この 10 章の、大きな戦についての幻をダニエルが見た直後ですが、複数の御使いが確かにいます。「12:5-6 私ダニエルが見ていると、見よ、二人の人が立っていた。一人は川のこちら岸に、もう一人は川の向こう岸にいた。6 その一人が、川の水の上にいる、あの亜麻布の衣を着た人に言った。」確かに、二人の天使が川の両岸にいて、そして川の水の上に亜麻布の衣を着た方がいます。したがって、おそらくは、ダニエルが見た第一の人はイエス・キリストご自身であり、他に二人の天使がいて彼に話しかけている可能性があります。

あるいは、同じ方がダニエルに語っているけれども、主イエスご自身が、敢えてご自分の力を使

わずに、ミカエルに助けてもらおうようにされたということもあり得ます。ヤコブが格闘した御使いのことを思い出してください。敢えて、ヤコブが勝利されるようにしました。けれども、ヤコブは「私は神を見た」と言いました。主ご自身が、神から遣わされた方として現れ、敢えてヤコブと相撲取り、レスリングみたいなことをされたのです。私は、主イエスご自身だと思いますが、大事なものは、たとえそうでなくとも、主ご自身の栄光をほとんど完全に現わす御使いということであり、ダニエルが主の栄光の輝きを見たということには変わりません。

⁷ この幻は、私ダニエル一人だけが見て、私と一緒にいた人たちはその幻を見なかった。しかし彼らは大きな恐怖に襲われ、身を隠して逃げ去った。

ダニエルと他に何人かが歩いていましたが、ものすごい幻を見ました。他の人たちは幻そのものを見ませんでした。その気配はしっかりと感じ取ることができました。震え上がって逃げ隠れています。ちょうど、サウロ、後のパウロがダマスコに行く途上で、復活されたイエス様が現われた時と似ています。同行していた人は、音は聞こえましたが、声は聞こえませんでした。またその御姿も見えませんでした(使徒 9:7,26:14)。そして、サウロは倒れて、目が見えなくなりました。この方は復活された主イエスご自身でした。このことから、ダニエルが見たのは主イエスご自身であり、パウロも、ダニエルのことが自分に身に起こったと思っていたかもしれません。

⁸ 私は一人残ってこの大きな幻を見た。内からは力が抜け、顔の輝きも一変して、力も保てなくなった。⁹ 私は彼の語る声を聞いた。彼の語る声を聞きながら、顔を伏せて地に倒れ、深い眠りに陥った。

幻にあるその姿を見て、衝撃を肉体に受けました。そして声を聞いたなら意識を失って、倒れてしまいました。そして語る声を聞いたら、顔を伏せて地に倒れて、深い眠りに陥っています。預言者ゼカリヤも、非常に眠くなっている場面が出てきます(4:1 参照)。そして、ゲッセマネの園にて、イエス様が祈られているのに、ペテロ、ヨハネ、ヤコブが眠ってしまいました。それは、激しいストレスもあったでしょう、そしてそうした神に仕える御使いも、またサタンのほうも激しい対立をしている中で、その霊的な刺激に耐えがなくなり眠ってしまったと思われる。

このように聖書の中には、他に、天にあるものの幻を見る人々がいます。既に話した使徒ヨハネの他に、イザヤもいます。彼は主の御座の幻を見て、「イザ 6:5 私は言った。「ああ、私は滅んでしまう。この私は唇の汚れた者で、唇の汚れた民の間に住んでいる。しかも、万軍の【主】である王をこの目で見たのだから。」と言いました。肉体の内にいる者が天に触れるということそのものが、ものすごい衝撃を受けます。私たちはダニエルがいかに直ぐな人であったか、神を愛した霊的な人であったかを読んできました。けれども、私たちの見る聖さと正しさと、天におけるそれはとてつもない大きな開きがあるのです。ダニエルでさえ、地上の肉体にある汚れと罪から免れているこ

とはなかったのです。パウロも、主イエスに会いましたが、その時の衝撃からでしょう、律法の行いではなく、信仰による義を知りました。「ピリ 3:7-9 しかし私は、自分にとって得であったこのようなすべてのものを、キリストのゆえに損と思うようになりました。8 それどころか、私の主であるキリスト・イエスを知っていることのすばらしさのゆえに、私はすべてを損と思っています。私はキリストのゆえにすべてを失いましたが、それらはちりあくただと考えています。それは、私がキリストを得て、9 キリストにある者と認められるようになるためです。私は律法による自分の義ではなく、キリストを信じることによる義、すなわち、信仰に基づいて神から与えられる義を持つのです。」

私たちが神に出会う、ということはこういうことです。イエス様が山上の垂訓において八つの幸いについて語られましたが、その始めは「心の貧しい人」でした。「マタ 5:3 「心の貧しい者は幸いです。天の御国はその人たちのものだからです。」と言われました。ある牧師がこの箇所について次のように説明しました。「この『貧しい』は窮乏状態です、何も持っていない人のことを言います。あなたの心で大事だと思っているものが全て剥ぎ取られた時、あなたは幸いですということです。私たちの誇り、自尊心がこれを認めません。私たちにとっては不可能な業です。」この貧しさを知って初めて天を味わうことができます。言い換えれば、天に触れたときに私たちは、自分の内には何も良いものがない、私は窮乏状態だと初めて告白することができます。真実なへりくだりは、主ご自身に見えることによるのみ訪れます。

次回、10 節以降を見ていきます。大いなる戦についての啓示を妨げている勢力があることについて、祈りがいかに、霊の戦いに突入することかについて見ていきます。